

最後に、私は子供の頃から苦勞したが、運がよ  
くシベリア抑留にも耐えて生還し、家を興し家族  
と楽しく生活できたことに満足しています。これ  
からも世界の平和と家族の安泰を願いながら、私  
の報告を終わります。

## 強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 天野 清 一

### 一、出生から終戦まで

私は、靈峰富士山麓の高原、標高千メートルと  
いう山紫水明の忍野村忍草で生まれ、農家に育  
ち、非常時日本の軍人となるため志願して昭和十  
九（一九四四）年十二月一日東部第七三部隊に入  
営（甲府第四九連隊）。直ちに北支派遣歩兵第一  
一〇大隊に入隊を命ぜられ、北支の山東省德州、  
衣第三〇四一部隊に入隊し、歩兵砲班で実戦訓練  
を受けた後、ソ、満、朝、三国の国境地帯の国境

警備（陣地構築）につきました。

昭和二十年七月、朝鮮咸興の飛行場警備隊とし  
て南下し飛行場の警備中、八月十五日、天皇陛下  
の終戦の詔勅が下されたと聞きましたが、私ども  
の部隊長は「それはデマだ、日本の軍隊は神の国  
の軍隊だ、米国なんかに負けるか」と、大本營発  
表を信ぜず飛行場を守っていましたが、八月二十  
三日朝、ソ連軍が戦車で飛行場に侵入、私どもは  
戦いもせず、その場で武装解除されました。

### 二、終戦からシベリア抑留まで

九月初旬の朝、非常呼集で「東京に帰る（東京  
ダモイ）」とソ連兵に騙され、咸興から興南まで  
二日間徒步行軍。興南の港で貨物船に押し込めら  
れ、船は日本海へ出たが、そのまま北上し一日半  
も海上を漂っていたが、九月十日頃、大きな港に  
上陸させられた。そこがウラジオストックという  
軍港だとソ連兵が教えてくれました。

「東京ダモイ」だと喜んでいた我々の夢は消え

て、地獄の苦しみが待っていたのでした。

当時のウラジオ港はソ連唯一の軍港だったので、我々日本軍人のスパイ行為を警戒してか、軍港上陸から市街の行進は暗闇の中を一晚じゆう歩かされました。続いてエゾマツ、トドマツの生え繁る原始林の中を三十キロメートルも徒歩行軍し、山中で露營してまた行軍し、幾日かたって「ダバハザ」という小さな村に着きました。

### 三、ダバハザ収容所生活の労苦

ここはウラジオからハバロフスクに通ずるシベリア鉄道の通過点で、小さな駅があるだけの山中。着いた日から軍用天幕で寝起きしながら原始林を伐採し、その丸太を積み上げ半地下式のログハウスを造り、両壁は泥で固め、ところどころに明かり窓をつけ、真ん中の通路にドラム缶のペーチカを据え付け、両側に二段ベッド式の座敷を造り、枯れ草の上に毛布一枚でゴロ寝、それが上等の夢の宿でした。

私どもの隊は五百人。一棟百人収容としても五棟、それに炊事場、病室等を含めて六棟、収容所の整備までに三カ月もかかった。収容所の仕事は森林伐採作業でしたが、ノルマは、二人一組で伐木し三立方メートルの薪を積み上げて一〇〇パーセントでした。私どもの組はいつもノルマ達成組で、収容所長から褒められたものでした。辛いなことに私と一緒に働いたのは、同郷隣村（明見村小見見在）の羽田益夫さんで、ともに農村出身で体も丈夫だったので呼吸も合ってノルマも達成できました。当時収容所では「働かざる者は食うべからず」という共産主義の規則によって当日七〇パーセント以上ノルマを上げたグループには普通食、七〇パーセント以下の者には二級食、四〇パーセント以下の者には三級食（病人食）と、働かによって三段階の食事が与えられたので次第に栄養失調となり、空腹のまま次第にやせ細って死ぬ人が出だしました。

それでも春五月から秋九月までは、シベリアの

山野にもアカザ、ヨモギ、フキ、キノコなど野草が多かったので、それを取って飯盒に入れ岩塩でゆでて空腹を満たし、また水は白樺の木を切り込んで垂れる水を貯め「天命水」だと名づけて飲んだものでした。

さらに困ったのは入浴で、一カ月一回。着のみのままでしたからシラミがたくさん発生し、発疹チフスなどの伝染病で亡くなった戦友もおりました。

#### 四、ウラジオ収容所に転入

昭和二十二年六月頃、私の中隊約三百人はウラジオストック市内の道路工事や市内の住宅建築要員として転住しましたが、ここの収容所は洋館建てで環境もよく、入浴も週一回くらいできましたので少しは清潔な生活もでき、給与もよくなりましたが、土木工事や住宅建築もノルマが高く、みんな五〇パーセント程度上げるのに苦労しました。それでも稀に郊外のソフホーズの農園の手伝

いに駆り出されたときは農家育ちの実力を生かして働きましたので、農場長から「天野、ハラショー（よく働く）」と褒められました。

その頃から収容所内では「共産主義、民主教育」が始まり、夜間の青年学習などにも出席して「早く民主教育を卒業した者は早く日本にダモイさせる」という声に励まされて真剣に勉強したものでした。

#### 五、東京ダモイの喜び

昭和二十三年九月末頃、私が作業場から帰ってくる時、収容所内は「東京ダモイ命令が出たぞ」と大騒ぎでした。その夜、私物検査だと言って、私どもが持っていた紙や鉛筆まで取り上げられましたが、「日本へ帰れるなら裸でもいいさ」と、みんな収容所内へ置いて翌朝、喜び勇んでハバロフスク駅からナホトカ行きの荷物列車に押し込まれ、二日ばかりでナホトカ港に着きました。

ナホトカ港では第一収容所から第三収容所まで

あって、暫時、共産主義教育の総仕上げというところで「インターナショナル」とか「赤旗の歌」を歌ったりデモ行進の方法なども教育されましたが、私どもの中隊は割合若い者が多かったので成績がよく、立派にテストが終わりました。それでも一カ月間、みっちり民主教育を受けた上、「日本青年突撃隊」という名を受けました。

昭和二十三年十月二十九日朝、日の丸の旗を立てた「永徳丸」という日本郵船の大きな客船がナホトカの岩壁に接岸し、私どもの中隊は一人一人点呼で氏名を呼ばれた者が乗船を許され、涙をこぼしながら「これで生きて日本へ帰れるぞ」とタラップを駆け上りました。

日本海を渡って十月三十日朝方、夢に見た舞鶴港に上陸した。舞鶴港では「愛国婦人会」のたすきをかけた人々が日の丸の旗を振って「兵隊さん、長い間御苦労さんでした」と大声でいたわってくれたので感激でした。「ああ、これが三年間待ち続けた日本の土地だ」とみんなで涙を流して

力足を踏んだものでした。

甲府駅で下車すると、兄の清広と戦友の弟が出迎えてくれたので感激でした。山梨県知事代理から感謝の挨拶を受けた後、一緒に帰った富士吉田の羽田益夫君とも別れを告げ、十一月二十日、懐かしの忍草の我が家に帰り着きました。

## 六、最後に言い残したい辞

私は二十世紀の世界戦争の中で日本男子として生まれ、軍人として祖国のために働きながら、戦いに負けてソ連の捕虜となり苦労しましたが、運よく生きて帰ることができ、祖国再建に尽くしながら、よい妻元子や長男清史に助けられて今日まで頑張って生きてこられましたことに心から感謝しています。

私がここで子孫や社会の人々に申し残したいことは、今後、日本はもちろん、世界じゅうとも決して戦争を起こしてはならないということです。

勝っても負けても、戦争ほど残酷なことはありません

ません。

どうか二度と戦争を起さないで、世界じゅうの人々が仲よく暮らせるように平和な日本を守って下さい。

## 強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 桜井彦寿

### 一、出生から終戦まで

私は、霊峰富士の山麓、標高千メートルの高原の農村で生まれましたが、父が軍人（陸軍中尉）だったので、非常時日本の防衛に当たるのは日本男子の当然の任務であると厳しく教えられて育ちました。

近くの富士吉田市（元瑞穂村）実業学校を卒業後、昭和十九（一九四四）年二月八日、現役兵として満州国黒河省孫吳第六九四部隊第一中隊（軍野戦砲兵隊）に入隊し、孫吳県勝光屯勝山近くの

山中、孫吳花見山に陣地進入し砲座を構築しました。

昭和二十年八月九日、ソ連軍が日本との不可侵条約を破ってソ満国境を南下したという情報を受け、私どもの部隊も花見山陣地の野戦砲兵隊も応戦態勢を整え、戦車に対しては大砲の射撃はもちろん、肉弾戦も予想し、三人一組一戦車に破甲爆雷を抱えての体当たり攻撃戦に出ることと決死隊を編成して待機していましたが、八月十五日正午、花見山陣地で終戦の詔勅を聞くことになりました。それは、私どもの部隊は関東軍の黒河方面軍の直轄砲兵隊で、当時としてはピカーの九六式超短波無線機を携行しておりましたので、関東軍司令部の命令、情報は直接受領することができました。私は下士官としてその玉音を直接聞いておりましたが、「忍ヒ難キヲ忍ヒ以ッテ万世ノ為ニ大平ヲ開カムト欲ス・・・」との終戦の詔勅に、「まさか日本が負けるとは」と部隊長以下私ども、みんなで泣きました。